

「縄ヶ池伝説」新説版

その昔、城端の蓑谷と言うところに市平と言うたいそうまじめな農夫がおりました。

市平はあさから晩まで働く毎日を送っております。

ある日、市平が仕事を終えて晩飯を食っておりますと家の戸をトントンと叩く者がおりました。

市平が戸を開けますと、そこには若くてとても美しい娘が立っております。

「私はそこの池の淵に一人で住むおりゆうと申します。

毎日一人の淋しさから話し相手が欲しくてつい、

この戸を叩いてしまいました。

どうか私の話し相手になって下さいな。」

おりゆうがそう言うもので、こちらも

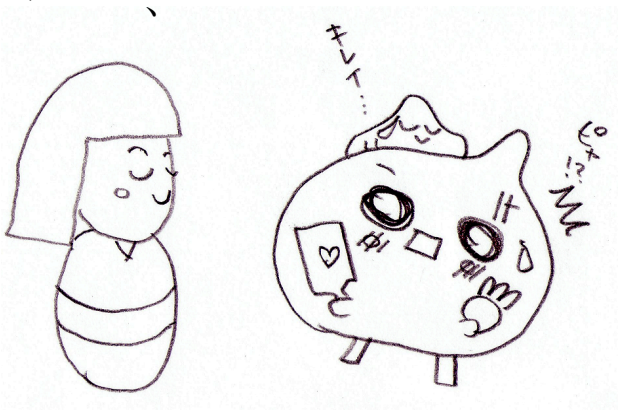
独り身の市平は「どうぞどうぞ」と

おりゆうを家の中に招き入れました。

市平とおりゆうは夜遅くなるまで語らい、

その日の内に恋におち、川の流れの様に

自然と一緒に暮らし始めました。



昼は二人で一生懸命に働き、夜遅くまで語らい、

その内おりゅうのお腹の中には市平の子供ができ、

二人にとって幸せな日々が続きました。

しかし、おりゅうのお腹が大きくなるにつれて、おりゅうがしばしば暗い表情を見せる事に市平は気が付きました。

市平はその理由をおりゅうに聞きたかったが、なんだか聞けずにおりました。

そして、おりゅうは玉の様に元気な男の子を産みました。

おりゅうは嬉しそうに涙を流しました。

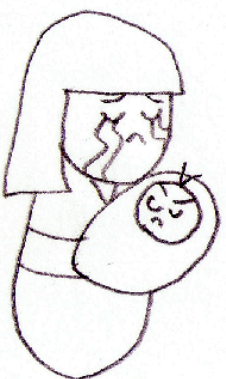
そんなおりゅうを見て市平はほっとしましたが、おりゅうは嬉しそうな表情を悲しそうな表情に変え、涙を流しながら市平に語りかけました。

「私はこの子を育てられません。」

市平が言葉を詰まらせて咂然としてみると、おりゅうは続けて言いました。

「実は私はあの池に棲む蛇です。」

昔、泰澄太師と言うお坊様に縄を張られて封じられておりましたが、



その力も弱まっておりますので、こうして貴方様のそばに出て参りました。この子は人と蛇の間に生まれた子。

このままではこの子の行く末が不憫でなりません。」

私は死んだ事にし、どうか貴方一人で

この子を育ててください。

私はあの池から二人の事を

見守っています。」

おりゆうはそう言うと、

涙を流しながら赤子を

置いて家を飛び出して

しまいました。

しばらく呆然としていた

市平は我に返り、我が子を左手に抱えて必死におりゆうの後を追いました。

市平は泣きながらおりゆうの名を大声で叫び、走りました。

市平に抱えられた赤子はそんな中でもスウスウと寝息をたてて寝ております。

市平は声がかかる程大きな声でおりゆうの名を呼び続け、池の淵にたどり着きました。



と、足元に大きな蛇の這った様な跡が池の中へと続いており
ました。

市平は泣きながら、一層大きな声でおりゅうの名を呼びました。
さすがに赤子もその声に目を覚まし、大きな泣き声をあげま
した。

市平は我に返り赤子をあやすと、赤子はすぐにピタリと泣き
止みました。

その時、池の方から女のすすり泣く声が聞こえてきました。
「おりゅう分かった、この子は
わしが立派に育て上げるからな。」

市平はそう言うと言をこらえて
池を後にしました。

市平はその子に「藤太（とうた）
と名付けました。」



藤太はすくすくと元気に育ち、腕っぷしも子供にしてはたい
そう強く、そんな藤太を市平も大事に育ててきました。

藤太が八歳のある日、けんかをして帰ってきました。

「オイラの母さんは蛇やったが？」

市平は隠すことなく「そうや」と答えました。

「いつか分かる日が来ると思ってた、お前の母さんはあの池の主で蛇の化身やった。」

とても美しく、いつもやさしく、よく働く母さんやった。」

藤太は驚く事もなく、

にっこり笑ってその日から

毎日の様に池の淵に行っては

「母さーん」と大声で

数時間呼び続けました。

藤太がそうして十八になった

ある日、いつもの様に母を呼ぶ

藤太の前に池の中から大きな

蛇が現れ、藤太の前に止まると、

みるみる内に美しい女に姿を変えました。

「母さんかい？」

そう言う藤太の声におりゆうは黙ってうなずきました。

「藤太や、母さんはずっとお前をこの池から見守ってきたが、

そろそろ私の力も尽きてしまう、藤太や、母さんの残りの力を

受け取っておくれ。」

おりゆうはそう言うと言いつつ体中から光を放ち、藤太はその光に目がくらんで思わず目をつむってしまいました。



藤太が目を開けるとおりゅうの姿はなく、池に満ちていた水も一滴も残ってはいませんでした。

ただ、藤太の胸の辺りが温かく、なぜだか母を身近に感じる様になっておりました。

それから藤太は立派に成人して、播磨国へ行って武士となり、体力、知力、武力を修行し、大変名高くなって天子様に召し寄せられて「藤原秀郷」と言う名前をたまわり、偉い鎮守府将軍に任じられました。

秀郷はその後、琵琶湖の大むかでを退治し、そのお礼に琵琶湖の

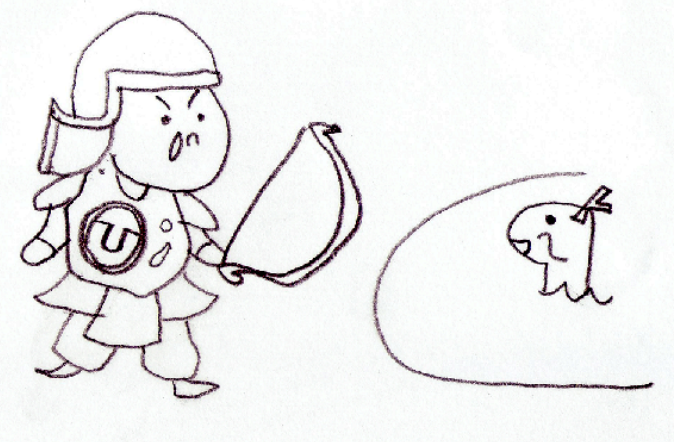
龍女に子をもらい、その子を母の

池に放すとまた水の満ちた

池に戻りました。

秀郷はその池に再び縄を張り、

その池は「縄ヶ池」と呼ばれるようになり、城端が水に困ることはなくなりました。



池に放たれた龍の子は「おじよろさん」と呼ばれ、年に一度は美しい女の人の姿になって、今でも城端の町に現れるそう。